

## 書評『第一次世界大戦はなぜ始まったのか』（別宮暖朗）

### 1. 失敗事例としての第一次大戦

なぜ輸出管理屋が第一次大戦に興味を抱くのかを、まず書いておきましょう。

輸出管理と切っても切れないのが違反事例。違反事例をどう見るかは人それぞれですが世間でいうような「極悪人の犯罪」ととらえるより、「普通の人が間違っはまりこんだ失敗事例」と感ずることが私の場合は多いです。

第二次大戦と違い、第一次大戦はどの国も始めるつもりはなかったといえます。最も積極的で火元といわれているドイツでさえ、カイゼルは直前になって戦争を回避しようとやきもきし、ついに開戦となったときは落ち込んだそうですから。つまり**戦争を始めたこと自体が、一種の失敗**だったわけです。（もちろん「クリスマスまでには終わる」筈がずるずる続いたことや、その後の英仏の地盤沈下も「失敗」にカウントされると思います。しかしそれらは言わば成り行きの結果で、人の手で食い止めることはかなり困難でした。しかし戦争を始めるまでの段階なら、まだしもコントロールが可能だった筈。それゆえ開戦にいたった経緯に注目するわけです。）

節目の百周年が過ぎ、この大戦の歴史的意義については何冊もの本が出ましたが、私にそこまで高級な関心はありません。本書は私の興味にピッタリの題名にひかれて購入したのです。

### 2. 本書もまた失敗だった

しかし本書の購入は失敗でした。何より、本書を読んでもなぜ開戦を食い止められなかったのかはわからないのです。なるほどサラエボ事件や当時の国際関係のことは書いてありますが、私の知りたいのは、その種の（高校の教科書に書いてあるような）ことでは**ありません。それらの背景の上で「なおかつ戦争を避けようとして避けられなかった」理由**なのです。書名で早とちりした私の失敗でした。（☞ [3節](#)）

それはともかく、本書の出来もまた大変な失敗作といえようかと思えます。欠陥をざっと申しますと

#### ① そもそも何を書こうとしたのか。（☞ [4節](#)）

（序文にはなんと「1860年代から現代に至るまでヨーロッパ、とりわけ西ヨーロッパがどのような混乱に陥ったかを説明すること」が本書の目的と書いてあります。

「意気やよし」ではなく「そりゃ無茶じゃないか」と言いたくなります。卒論の指導教官なら「もうちょっと手ごろなテーマを選びなさい」と諭すことでしょう。

このような遠大な意図のもとで書かれるのでは、巨視的といえは聞こえはよいがピントの粗い叙述になっても不思議はありません。）

#### ② そのくせ細かいエピソードをトクトクと語る。

- ③ 実はただの嫌中韓ヘイトスピーチではないのか。(☞ [5 節](#))  
 (端々に両国を批判する記述が出てきますが、本題から外れた述懐が多いのです。ストーリーの中で必然性があるのならもちろんかまわないのですが、本著者の場合は単に「嫌いだから嫌いだと言う」だけ。なぜそこで中韓批判が入るのか、それを入れることで第一次大戦への理解が深まるのか、というものではなく、「言いたいから言った」という印象です。そこに「本題」も「必然性」も関係ないというのは、しかも品のない痛罵ですから、読む方はたまりません。)
- ④ 文章の質が低い。(☞ [6 節](#))

### 3. 開戦「理由」の記述

著者は次の①～③の3項目を強調しています。

#### ① セルビア右翼の暴挙

要するにサラエボ事件のことです。たしかにこの暗殺事件がなければ大戦は起こらなかったでしょう。しかし私たちは「サラエボ事件こそが核心だ」で満足はできません。はじめに書いたように私たちが知りたいのは「サラエボ事件のあと、なぜ各国とも望まなかったはずの戦争まで進んでしまったのか」なのです。

#### ② オーストリア軍部の暴走

オーストリアはおそらく対セルビア戦争しかイメージしていなかったのでしょう。ロシアが出てくるとしてもドイツが相手をしてくれ自分は安泰、まして大戦につながるなんて、夢にも思わなかったのです。だからあれほど強面路線一点張りだったのだと思います。その意味ではたしかに、オーストリアが大戦のきっかけを作ったとはいええます。しかし同国の強硬路線は、少なくともドイツにおいては想定内でした。それにオーストリアは世界大戦を起こそうとしていませんし、いわゆる連合国にすすんで手を出してもおりません。(要するに第三次バルカン戦争をやりたいかっただけということ)  
 とすれば、オーストリアの動きは、所詮背景でしかありません。バルカンにおける紛争を世界大戦の次元に押し上げた主体はドイツなのです。

#### ③ ドイツの開戦は総動員令の特異性

そこでドイツに注目すると、どうもその動きに一貫性や主体性が感じられないのです。仏露両国をコテンパンにやっつける計画を何年もかけて作り上げ、また実際にもほぼシナリオ通りに序盤戦を引っ張ったドイツなのに。ふつう、綿密な「犯行」計画を立て、それを実行に移した犯人ならば、決行までの道筋にも迷いはない筈。ところがドイツの場合序盤ではオーストリアに「どんと行け」と支持を表明しながら、それが仏露との破局につながるとは予想せず、そのくせ仏露を叩きのめす計画は綿密に作り上げる。しかも戦雲が近くなると戦争回避を画策し、でも結局は事前のシナリオ通りにフランスを叩

きのめしている。アクセルとブレーキを交互に踏んでいるような印象ではありませんか。大戦がはじまった理由・経緯を考える際に悩むのは、この一見脈絡のない出たところ勝負の迷走ぶりなのです。一連の動きをどう理解したらよいのか、そこにどのような流れがあるのか、と。

さてドイツの総動員令の話です。その特異性とは、単に兵隊を動員して部署につかせるだけでなく、国境を越えての作戦発動までがセットになっていた著者はいいます。

一方ロシアの総動員は、作戦行動までは含みません。但し同国は、特定の国境地帯のみを対象にした「部分動員」計画を作っておらず、緊張関係にあったオーストリアに備えようとするれば、全国境を対象にした「総動員」をかける以外になかった。そしてこれに反応したドイツも総動員令を下し、それがただちに戦争開始となったという解説です。

おそらく、その論理自体は間違っていないと思います。またカイゼルは、総動員令を出した直後、軍の西行を止めようとして、「技術上の理由」からモルトケ参謀総長に拒否されています。(タックマン『八月の砲声』によれば、その「技術上の理由」は錯覚だったそうですが、主要関係者がそれを信じていた以上、たとえ錯覚であっても効果は同じといえましょう)

しかしそれらはいささか**技術論に偏している**ように思います。総動員令をかけた時点でカイゼルは開戦を決意しており、軍の西行を承知していたのですから。

つまりカイゼルが主導するドイツ外交の迷走ぶりに光を当てなければちが明かないのです。

ではこの問題を著者はどう扱っているか。

**基本線としては、オーストリアの強硬路線に振り回された、巻き込まれたのだ、と考えているようです。** ちょっと引用してみましょう。

A (P.120 <ドイツが与えた白地小切手>より)

六月二十八日、事件の当日、オーストリアの駐ドイツ大使スツォグイニー・マリッヒはウィルヘルム二世からポツダム宮の遅い夕食に招待された。

「ロシアの態度はいずれにせよ敵対的であろう。もし両国の戦争が避けられないとすればオーストリアは、ドイツが忠実な同盟国として味方になるとみて差し支えない。ロシアは未だ戦争の準備が出来ていない。フランツ・ヨゼフ帝は平和愛好でセルビアに侵入することは好まないであろう。しかし仮にセルビアへの戦争行為を決定したならば、この好機を逸することは好ましくない。ルーマニアについていえば、カロール国王は、正しく行動するであろう。ブルガリアのフェルディナンド国王は信頼できないが、オーストリア・ブルガリア間の条約を破ることはない」と皇帝は語った。(中略)

ハプスブルク帝国は、ドイツ帝国を自分の部局にしたのも同然であった。ただし、フランツ・ヨゼフ帝も二人の伯爵もオーストリア政府もドイツ陸軍は“壊れた機械”で、いったん総動員がかかると、どこに攻めるかわからない点を知らなかった。

オーストリアの一部局になったのも同然、ということは同国に踊らされていたということ

ですね。もしかしたら大変な目にあうかも知れないの気づかずに。

それから「壊れた機械」云々とは、一旦総動員令をかけると、自動的に戦争を始めてしまうことを意味しています。ここからも、もとはオーストリアが火をつけたのだが、ドイツがまさかそこまで暴走するとは火をつけた当人も予想できなかった、というニュアンスが伝わってきます。要するにオーストリアが黒幕だと著者は主張しているわけです。

外交ではしばしば、最初からそのつものくせに勿体つけて「巻き込まれて仕方なくやったポーズ」がとられます。露仏両国をまとめてやっつけるシュリーフェンプランを何年も前から用意していたドイツが「単に踊らされていた」とは考えにくいのですが。

ところがしばらくすると、オーストリアに振り回されてロシアとの戦争になったらどうしようか、と悩み始めます。そんなことオーストリアへの全面支持を表明した時点で予期していた（口にのぼせてもいる）のになぜ今更、という気はします。著者はそのあたりを次のように記しています。

**B (P.122 <ウィルヘルム二世の変心>より)**

ウィルヘルム二世は、段々興奮から覚めてきて、慎重な態度を求めるメモを臣下に配った。「オーストリアは不注意に厳しく一方的な調子でセルビアを咎めた。挑発的な効果を生み、問題を複雑化させるであろう。セルビアはアドリア海への出口を求めている。オーストリアは認めない。ロシアは背後にあって、このセルビアを扇動しているのである。

するとドイツには条約上の責務が生じる。ロシアがオーストリアを攻撃したらドイツは参戦せねばならないのか。こうなると、動員そして二正面戦争だ。フランスにはイギリスの支持がある。ドイツにとって生死をかけた三つの超大国との戦争になる。全部を賭して戦い、敗北する。

みなオーストリアの、セルビアをアルバニアのデュラツォへ到達させまい、という意図から生じている。こういったことはドイツの開戦理由にはならない。ドイツの条約上の責務を超えている。ドイツ軍と国民を他国の政策に従属させてはならない。全力を挙げて阻止されねばならない。

三国同盟は署名国に既存領土について安全保障を与えている。他国の領土紛争について支持を与えるものではない。オーストリアがロシアによって攻撃されたのであれば、条約上の責務が生じる。だが、オーストリアが『挑発行為』をとれば、責務は生じない。

オーストリアはセルビアに関連して発生する問題について仲介に応じるべきである。もしロシアがこの仲介に従わなければ、ロシアは他国の不興を買うであろう。ロシアはオーストリアとの戦争を望んだとみなされる。

アルバニア問題はどうしてもよくなり、ロシアは平和の破壊者になり、常識をもつ人々の敵となるう]

デュラツォあるいはデュラツォは、アドリア海に面する港湾都市で、現在、セルビアやマケドニア、コソボの外港として繁栄を取り戻している。ウィルヘルム二世の地政学的所見は正しく、バルカン半島の内陸国は、黒海でなく、アドリア海に外港を求めるべきであった。

ウィルヘルム二世は、オーストリアが仮想敵国（セルビア）と第三国（アルバニア）の間の武力紛争に関連して、セルビアに先制攻撃をかけたならば、条約（ドイツ・オーストリア間）上による戦争には当たらないとした。明らかに、オーストリアに与えた白地小切手と食い違っていた。問題の核心は「先制攻撃による戦争開始に条約上の義務は生じない」という点にあった。ウィルヘルム二世は、性格的に外国の客人には丁寧、懇切に接し、臣下には厳しい統制を求める人物であった。

露墺戦争に「巻き込まれる」のがいやなら、カイゼルとしてはオーストリア支持を撤回す

るのが筋だと思うのですがそれはせず、代わりに「両国が戦争するならおれの見ていないところで勝手にやってくれ」ということなのでしょうね。

そう考えると、7月に入ってからドイツ首脳陣が揃って休暇に出かけて首都を空にしたのを「おれは見ていないからな」という態度のあらわれと理解できないこともありません。仮に英仏あたりから仲介が入るとしても、それは「露塊に直接言ってくれ、おれには声をかけるなよ」ということを含みとして。

著者は「まさかオーストリアがほんとうに戦争をするつもりとは思わず、恒例だからということで夏季休暇に出かけた」という扱いをしています。(引用 C) 先の引用 B がなければ、それもそうかなというところですが、ちょっとおかしいと思いますね。

(ちなみに木村靖二『第一次世界大戦』は「他国の疑念を招かないよう、政府・首脳陣に休暇に入ることが勧められ」と述べています。その方が自然な理解と思います)

C (P.123 <夏季休暇に入ったドイツ皇帝>より)

七月六日月曜日、ウィルヘルム二世は、恒例の夏季休暇に入った。ベートマンも数日後、ホーヘンフィノウにある自分の荘園に向かった。ヤゴウ外相は、新婚早々でスイスのフィーアバルトシュテッテ湖畔のルツェルンに向かい、ティルピッツ海相はスイス山あいのタラスプに滞在した。

他の閣僚や陸海軍の司令官や参謀もスイスやイタリア、クロアチアの保養地に向かった。小モルトケ(参謀総長)はハンノーフェルの伯母の葬儀に参列していた。七、八月は夏季休暇の季節であり、ウィーンやベルリンから主だった人物は姿を消していた。

ウィルヘルム二世だけは、曖昧な不安を抱き、当日朝、ベルリンに残った。ファルケンハイン陸軍大臣、海軍軍令部次長、参謀本部課長らが次から次へと挨拶に来た。

ファルケンハインとはウィーンからの報告を話し合った。後日談によれば

「オーストリア政府は急いでいるように見えず、戦争について決心していなかった」

ベルヒトルトから戦争を決心したと通知されていたにもかかわらず、戦争のような大事に至ると、人間は咄嗟に現実と受け止めないものである。ファルケンハインは小モルトケに休暇を切り上げる必要はないとわざわざ連絡した。

ともあれオーストリアは強気一点張りで、7月23日、セルビアに最後通牒を突きつけます。直前に内容を見せられたドイツ首脳陣は「なんと強硬な。ほんとに戦争になる」と驚いたといいますから、心の底ではやはり「よもや戦争にはなるまい」の思いもあったのでしょう。そこからあわてて外交活動を活発化させるのですが、結局は間に合わず28日にオーストリアはセルビアに宣戦布告、31日ロシア総動員令、8月1日ドイツ総動員令・対露宣戦へと発展します。

あらためてドイツはなぜアクセルとブレーキを交互に踏むようなまねをしたのか不思議に思います。その時々で別の人物が判断し行動していたのならともかく、一貫性に欠けることおびただしいではありませんか。「カイゼルがそういう人だったから」といえばそれなりに納得できるような気がします。著者は判断を避けています。(では客観記述に徹するのとかといえば、そうでもないのです。オーストリア・セルビア、ついでに中韓については「熱く語っている」のですから)

この書名「看板に偽りあり」と思う所以です。

では私の考えはどうか？ やはりカイゼルのキャラクターに注目したいと思います。彼は武張った発言や軍拡は大好きでしたが、実際に戦争をやった経験がない人なでした。この人の手口は、まず軍備を拡張し、それから恫喝外交をやる。これまではそれでうまく立ち回ることができたのです。サラエボ事件以後の経緯においても、それを念頭に見ていけば、いくらか納得できそうな気がします。そこで得た印象は、綱渡り外交の「名手」（と自分では思っていた）が、火遊びをしすぎて元も子もなくなるといったものでした。

一貫性の欠如についても、彼の心理の揺らぎと考えるのが近いように思います。強気のブラフ路線がベースですが、時折「まさか相手が強気に反応するとは！」とびっくりしたというような。

#### 4. 序文は何を言いたいのか

2 節の①でも少し触れたことですが、この序文が『第一次世界大戦はなぜ始まったのか』というタイトルの書物にふさわしいのか、下記引用から考えてみてください。

D (P.8<はじめに>を丸ごと引用)

ヨーロッパは、第一次大戦によって大きく変化し、東ヨーロッパで多くの独立国が生まれた。第二次大戦後、ドイツ領土縮小を除けば大きな変化はなかった。ところが 1990 年代から再度変化の過程にあり、今なお変化の過程にある。

この本の目的は、桜田門外の変や普墺戦争が起きた 1860 年代から現代に至るまでヨーロッパ、とりわけ西ヨーロッパがどのような混乱に陥ったかを説明することである。なぜなら西ヨーロッパが混乱するときは日本も混乱、平和であれば平和であったからだ。

日本はアジアの一部でなく、ヨーロッパの一部であるかのような歴史をたどった。今後もこの公算は大きい。かつての日本の悪夢は米露対立でなく、英独対立であった。英独が対立し、米露がイギリスに味方したのが両次大戦であり、ドイツは二回ともほとんど単独でロシアまたはフランスを倒した。

20 世紀に入り、第一次大戦の勃発した 1914 年までの間は、ベルエポックと呼ばれるヨーロッパの「古き良き時代」であった。ヨーロッパでは、ご大国、独英仏墺露による「コンサート・オブ・ヨーロッパ」が成立し、国家間で対立があっても、貴族的な外交官による会話または社交で解決され、平和が守られた

100 年前の 1914 年 8 月 4 日、夢の如きベルエポックは突然、打ち砕かれた。ドイツ陸軍師団 35 個師団、100 万がベルギーに侵攻した。

このドイツ大攻勢は、9 月 8 日、フランス軍が、全ての戦線でドイツ軍正面を突破し、大反攻に出ることにより、失敗した。後世になり「マルヌの奇跡」と呼ばれた。ドイツ軍の敗退は一週間続き、エーヌ河に達した所で、停止、塹壕を掘り、防御に入った。戦争はこの後、4 年数か月続いたが、西部戦線はこの線からほとんど動かなかった。

戦闘は新兵器の導入によって凄惨を極めた。機関銃・戦車・飛行機・毒ガス・手榴弾がヨーロッパで初めて使用された。参戦国は拡大し、連合国 28 か国（このうち実戦に参加したのは 16 か国）、中央同盟諸国は 4 か国（ドイツ、オーストリア、ブルガリア、トルコ）に上った。

さらに銃後の社会をも巻き込みヨーロッパ社会を根底から変えた。1914 年におけるヨーロッパの総人口は、およそ 4 億人であった。第一次大戦に動員されたのは、6500 万人、そのうち戦死者は 860 万人であった。いずれの数字も第二次大戦より大きい。

今も過去も戦争とはヤングメンズ・ゲーム、すなわち男子若者の争闘である。ヨーロッパの若者

は、ほとんど自発的に隣国の若者と小銃あるいは機関銃で塹壕をはさんで撃ち合ったのである。

戦間期は、ヒトラーのような「暴れん坊」がいて、外交官の出る幕がなく、再度、あのような大戦争に突入していった。二つの大戦争が、人々の精神に与えた影響はあったが、人的・財産的損害が致命的であったとはいえない。残酷なようだが、若い男子の補充は簡単にできた。財産の復旧も容易であった。

日本にとっては、第一次大戦は遠い戦争であったが、日英同盟を理由に参戦した。だがこのとき、日本が「局外中立」方針をとれたかといえば、疑わしい。アメリカも同様であったが、局外中立を通せなかった。ヨーロッパ大戦ともなれば、交戦各国は必死に日米に参戦を働きかけ、そのうえ貿易は縮小し交易線を脅かされる。

第二次大戦後 30 年経った 1975 年、ジスカールデスタン仏大統領の提唱により、G5 が開催された。当時の日本の大幅貿易出超を咎める意図があったといわれるが、「コンサート・オブ・ヨーロッパ」の再現でもあった。

イタリアとロシアはその後、押しかけ参加、カナダはアメリカによるゴリ押しで参加、現在の G8 になった。また小渕恵三は「中国も加えるべき」と誰にも賛成されない提案を行い、日本人の奇妙な性向を浮き上がらせた。村山富市は予備会議の席上で顔面蒼白となり、一言も喋れなかった。

「コンサート・オブ・ヨーロッパ」は、共同体意識のうえに成立している。ところが日本人は遠い所において会費だけ払い、会議では発言せず、ニコニコ眺めているのが好きなのであった。

2014 年 1 月、安倍晋三は、「今年は第一次世界大戦から 100 年を迎える年である。当時英独関係は大きな経済関係があったにもかかわらず、第一次世界大戦に至ったという歴史的経緯があった。

(略) 中国の経済の発展に伴い、日中の経済関係が拡大している中で、日中間の問題があるときには、相互のコミュニケーションを緊密にすることが必要である」と述べ、現在の東アジア情勢について第一次大戦前の英独関係から論じて非難された。

現在の中国が、第一次大戦ときのドイツと同様に周辺国全てに緊張を強めていることは紛れもない事実である。さらに中国の「二国間関係に介入するな」という理屈は国際法が理解できていないゆえである。

中国海警を名乗る船舶がベトナム船の舷側に意図的に衝突している。写真によって中国側の意図的な加害は明白である。ところが中国は事実を否認した。第一次大戦以前のヨーロッパでもここまでの虚言はなかった。

今年に入ってロシア軍がクリミア半島を占領した。ウクライナはどの国の集団安全保障にも入っていない。ヨーロッパ諸国は、武力行使が国際法違反と指摘できても、それ以上は踏み込めない。

ウクライナもベトナムも自らの意志と関係なく攻撃されたのである。戦争は、自らの意志とは関係なく巻き込まれてしまうことがある。その歴史の教訓が第一次世界大戦である。

**長々と引用しましたが、著者は何を言っているのでしょうか？**

まず①第一次大戦のインパクトの大きさ、②本書の「壮大」な意図、そして③この大戦がどんなものだったかのダラダラとした記述が続きます。それから④日本の参戦が不可避だったこと、⑤1975 年以降の主要国会合に関する雑感、⑥最近の中国の横暴、です。最後は恐らく中国の挙動を意識してでしょうが⑦「自らの意志と関係なく攻撃され、戦争に巻き込まれる」可能性が第一次大戦の教訓としめくくっています。

わかりにくい書き方ですが、どうやら「今の中国は当時のドイツのようだ。日本が戦争に巻き込まれないよう、歴史の教訓に耳を傾けよ」といいたいように思えます。

ここで著者の主張の評価は控えますが、誰が見ても次の3点は事実認識としておかしいでしょう。

第1は、本篇の中で著者はドイツを「オーストリアの暴走に巻き込まれた」と扱っていることです。序文と本篇とで別々のことを書いてはいけません。

第2に、ウクライナやベトナムは「巻き込まれた」ではありません。「狙われた」のです。

第3に、集団安全保障体制未加入がウクライナ・ベトナムの不運というのはうなづけないこともありませんが、大戦の教訓として「だから集団安保だ」と結論するのは短絡的です。なぜなら著者は同盟関係を持たなかったことが不運につながった国としてベルギーを挙げていますが、独逸や露仏の同盟（あるいは協商）関係が大戦勃発にとって、より大きな影響を及ぼしたことを見落とすわけにはいかないからです。少なくとも本篇の読者には、それは明らかな筈。ひとり著者がそれに気づかないとは不思議なことです。

ひょっとして、本篇と序文の書き手は別人なのでしょうか？

## 5. 場違いな中韓批判

ヨーロッパ情勢を語る中に、中韓批判が紛れ込んでいる例を示します。

E (P.99 <セルビアの秘密結社>より 1903年にセルビア軍内の一派がクーデターで国王を暗殺した記事を受けて)

クーデターを実行し、君主を弑殺しながらも罰されないとするれば、クーデターと暗殺の行き交う巷に転落する。

現在の世界でも、他国人へのテロを実行した暗殺者を検証しようとしている国は、セルビアと伊藤博文を殺害した安重根の記念館を暗殺現場に建てた韓国の二か国だけである。両国ともに、暗殺事件とクーデターが絶え間なく発生することは偶然ではない。

※ ここで韓国が登場するのは唐突の感否めません。安重根記念館は私も不愉快ではありますが、それをここで持ち出すのは、少なくとも本書のテーマからは外れている。恐らく著者は「韓国が嫌いだから嫌いだと言ったまで」のことなのでしょう。

※ クーデターや国王・要人の暗殺は、ギリシャやロシアなどでもありました。また顕彰こそされていませんが、米国が再三にわたりカストロ暗殺を企図したのも周知の事実。我が国も、閔妃事件を起こしています。それに張作霖事件も。(首謀者河本大佐をかばって、陸軍が責任をうやむやにしようとしたことも忘れてはいけません) また伊藤博文は高杉晋作らとともに英国公使館焼き討ちに参加しています。あれもレッキとしたテロ事件ではありませんか。「そういう国だから首相暗殺事件が何度も起こった」と言うことになるのでしょうかね？

F (P.142 <テロリズム容認国家は許されない>より)

テロリズム容認国家は必ずしも小国だけではない。二〇一四年一月、韓国は、中国の支援を得て、伊藤博文を暗殺した安重根の記念館を黒竜江省ハルビンに開設した。中国韓国両政府は

テロリストを顕彰したのである。

ハルビン駅構内が、伊藤博文が暗殺された場所だが、そこにわざわざ記念館まで作るというのは、中国による韓国を利用した反日運動の一環である。中国は一党独裁国家であり、習近平は国家主席を名乗るが笑うに値する人物であって、各種国際会議で失笑を買う程度の人物である。

中国と日本の GDP 総額はほぼ同額とされる。この水準と比較すると韓国はその一〇分の一程度である。ただし、日本の人口は中国の一〇分の一であって、日本の一人当たり GDP は、中国の一〇倍である。韓国政府好評の数字は疑わしいものが多い。一例を挙げれば、韓国訪問の年間外国人客を一〇〇〇万人以上と発表したことがある。航空機の発着回数を掛け合わせても、信憑性が薄い。

当時のセルビアは、一九〇三年のクーデターの戦慄すべき国王・王妃殺害状況やドイツへの「生豚」輸出頭数の数字の不突合など、国際的に笑われる存在であった。伊藤博文は、条約改正交渉で「我が国をバルカンの山猿国より下位に置くのか」とヨーロッパの外交官に叫んだと伝えられる。この山猿国とは、セルビアを指した。

フランスとセルビアが共同してサラエボ事件の殺人犯プリンチップの銅像をパリに作ると言ったらどうだろうか？ フランスの文化的・歴史的矜持が許さないであろう。殺人犯の銅像をつくる愚行は自国史への冒瀆にもなる。

近代日本は、欧米以外で初めて産業革命を成功させ、近代的軍隊を作り上げ、単独で中国・ロシアを打倒した。中国にこのような歴史はなく、富国化を焦り、共産化を実施、社会の近代化に大きく立ち遅れた。安倍首相発言に反発した習近平の「現在の我国は、第一次大戦前のドイツより大国である」という自己顕示欲も嗤うべきものだろう。自国を大国だと言い立てる国家代表は珍しい。大国、中国の安重根顕彰は、その奥に根深い日本への嫉妬があり、小国、韓国と一緒にいわば小国嫉妬協商を構築したのである。

※ 「熱い」ですねえ、別宮センセイ。発言の機会があればただちに信念を吐露なさっています。はいはい、韓国は狂っており中国は二流国と聞いたかったですね。

## 6. 文章の質の低さ

ここまで読んで下さったみなさんはすでに実感されているかと思いますが、本書は文章もひどい。実例を見てみましょう。

G (P.123 <沸騰する反セルビア感情>より)

G<sub>1</sub> 二回のバルカン戦争中、セルビアはじっさいにアルバニアに侵攻した。刻下の一九一四年七月危機は、かつてのセルビアの暴挙とはかなり違う結末をとげた。

G<sub>2</sub> バルカン・クオレルは、ヨーロッパの年中行事であったが、ロシア総動員は「青天の霹靂」であった。

G<sub>3</sub> ウィルヘルム二世が意図して戦争に邁進していったというのは当たらない。問題はむしろドイツ国民でありオーストリア国民であった。新聞が普及したこともあって、国民は事件の一報を直ち

に知り、反セルビア感情が沸騰したのである。

G4 バルヒトルト（外相）やフォルガッハ（次官）は決してオーストリア国民に影響力があつた人物ではなかつた。むしろ敬愛され辛苦をなめた皇帝が、この老齢で悲劇にあつたことへの同情と唾棄すべきセルビア人への憎悪が止まらなくなつた。

G5 ウィルヘルム二世は、報告を読み終えたあと、ベートマン・ホルバーク首相とチンメルマン外務次官をポツダム宮に呼んだ。

G6 オーストリアに返事すべき内容の議論は三人の間で、淡々と進んだ。情況は深刻、オーストリアの決心待ち、同盟上の責務、ルーマニアを刺戟しないこと、ブルガリアを味方につけることが議論された。

G7 夕刻、ベートマンはオーストリア大使に皇帝の詔書を手渡した。「最速のセルビアへの侵攻が、最高の解決策であろう」と付け加えた。ただし、オーストリアの意思決定はいつも遅く、大胆な方策は決して採用しないという先入観もあつた。

G8 ベートマンは自らピアノを弾く教養人であり、温厚な人物であつた。学校の成績は優秀で余暇にはギリシャ古典を原書で読んでいた。ビスマルクはかつて

「プロイセンには優秀な枢密顧問官や官僚出の閣僚はいるが、政治家がいない」という警句を残した。ドイツが統一されても、あまり変わらなかつた。この言葉は非常によくベートマンに当てはまり、学校の成績だけ良かつた官僚出身の無能政治家であつた。

読みにくさの一因は、各パラグラフにつながりがないことです。どういう意図でその段落を配置したのかが見えない（いいかえれば「なくてもよいパラグラフ」を読まされている）と感ずります。

まずG1。1914年の「かなり違う結末」とは世界大戦になつたことでしょうか？ そんなことは書かなくても分かっている。また「前二回」との違いは「セルビアが侵攻しなかつた」ということかと思いますが、そりゃそうですね。今回セルビアが「侵攻される」立場だつたことも言うまでもない。つまりこのパラグラフには存在意義がありません

G2 でロシアの総動員令を仰々しく「青天の霹靂」と表現しています。G1 と組み合わせで「第一次・二次バルカン戦争との差はロシアの登場といたいのか」という気もしますが、それでは大戦勃発にとって決定的だつたのはロシアの動きだということでしょうか？ オーストリア暴走説や、ドイツ（≒中国？）悪者説をばらまいておきながら、どういつもりなのでしょうね。単に勿体ついただけじゃないか。それに以後のパラグラフにロシア登場のインパクトは全く触れられていないのは不審です。どうもこのパラグラフもただのお飾りと見た方がよさそうです。

G3 で「ウィルヘルム二世が戦争へ驀進したのではない（新聞と国民感情ゆえだ）」といますが、著者によればドイツはそもそも「巻き込まれただけ」の筈ですから、今更そんなことを書く必要はない。（「オーストリアのせいだ」で済む話。いや「ロシアの介入だ」ということでしょうか） いやいや「開戦への原動力はドイツだが、その中でカイゼルより国民感情が中心的役割を果たした」と言いたいのでしょうか？ とすればこのパラグラフもな

いほうがいい。

従って G1～G3 はなくてもよく、「沸騰する反セルビア感情」の見出しにつながるのは G4 のみということになります。(その G4 にしても「憎悪が止まらなくなった」の主語にドイツ国民は含まれないように見えませんか?)

それから G5 でウィルヘルム二世が読んだ「報告」とは何なのでしょう? そして会議はいつ行われたのか? こういう肝心の事を書き落とすのは困る。ドラマ仕立てにして臨場感を盛り上げようと著者は努力しているようですが、それより「5W1H」じゃありませんか? (新入社員に説教しているような気分になってきました)

G6 はまあいいとして、G7 は「いつの夕刻か」が抜けています。

最後に G8、ベートマン・ホルバーク批判はこの節の中でどんな意味を持っているのか? 要するに、この節全体が無意味なのです。

このついでに、「5W1H」を欠いた例を一つ引きます。

H (P.141 <テロリズム容認国家は許されない>より)

一九〇八年のボスニア危機から、セルビア政府はテロリスト団体を育成・容認し、その最終的結末がサラエボ事件であったという主張である。テロリズム容認は、国際紛争でもっとも多いテーマである。

これは誰の主張でしょうか? それとも「みんなそう言っているよ」ということでしょうか? 蛇足ながら「テロ容認国家はダメ」など、今更教えていただくまでもない話です。敢えて節を設けて力説したのは、オーストリアの暴走が「実は“テロとの戦い”であり正しかった」と言いたいからでしょうか?

著者は某金融機関(できれば社名を公開いただきたい。卒業された大学名は公開なさっているのだから)で活躍されたこともあるそうですが、こんな文章能力でつとまるほど金融機関はちょろい職場なのだろうか、と不思議に感じました。

もちろん著者だけが悪いものではありません。まともな編集者であれば、あのような序文(☞ [4節](#))をそのまま通すはずがありません。(ろくに読みもしなかったのでしょうかね)「集団的自衛権を考える 世界史の教訓 最良のテキスト」(帯)、だの「軍事史の鬼才が存分に分析」(カバーのそで)だのと寝言が書いてありますが、天下の文春も墮ちたもの、と思います。